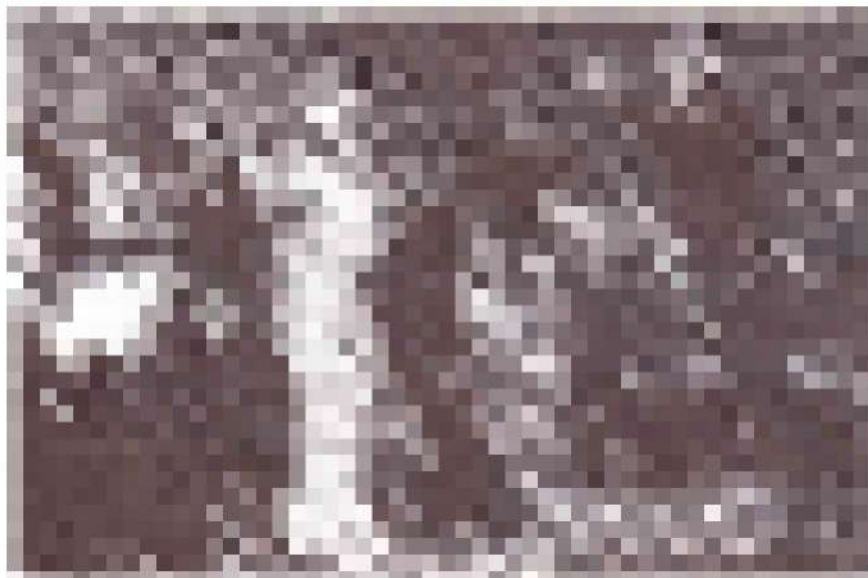


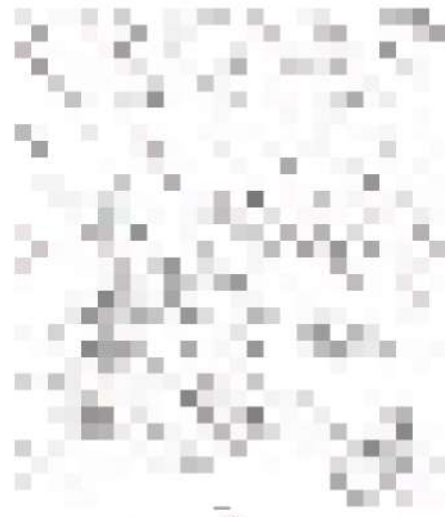
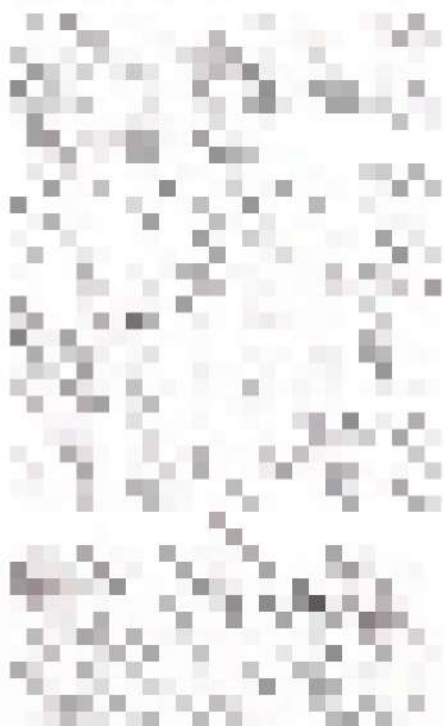
Scramble Shot



右F級生の演劇部。左がソングバグ、エルバマン、マリアム、アストロ・アケメリ。



カラフルな色彩で目を引いたバイエルン州立歌劇場の「生徒のための公演」。左からオロペーザ、ペーレ、グリル、フォミナ



Opera 注目テノール歌手のペーレが歌う、バイエルンの《後宮からの逃走》

毎年恒例の贅沢な「生徒のための公演」として、バイエルン州立歌劇場のモーツァルト《後宮からの逃走》を3月30日に観劇した。母国語の歌詞プラス、ヒジャブを被った女性がストーリーを観客に語る形の演出なので、子供向けと言えるが、実際はカラフルな色彩で目を引く割に、直立不動状態のアリアが多く、飽きてしまうのではないかと心配した。

その上、コンスタンティン・トリンクスの指揮がなんとも平坦なのだ。舞台上でハーレムに出入りする男性が自ら去勢する演出があったが、モーツァルトの音楽までも去勢してしまったかのようだ。綺麗々だけでアクセントが皆無なモーツァルトは、実際以上に長く感じられた。

歌手陣も端正に歌えてはいるのだが、それ以上に何かを訴えてくることはない。コンスタンツェのリゼット・オロペーザは声の線が細すぎ、高音も後ろ向きに当てるので達成感がない。ベルモンテのダニエル・ペーレは、高貴な歌唱がモーツァルト・テノールに最適なので、今後注目したい。オスミン役のピーター・ローズはこの公演に活気を与えたが、声は小粒だ。ブロンデのソフィア・フォミナ、ペドリッリョのマシュー・グリルも好演していたが、全体的にハイレベルな学生オペラのように、生徒たちには受けていた。

情操教育や将来の観客育成等の目的だけでなく、普通とは違う部分で、口笛や笑い、同情など、新鮮な反応を示す生徒達の正直さを体験するのは、演奏者にとっても一般の観客にも有意義な企画と言える。

(中 東生)